



2年目の始まり

日方圭子

英国・サリー大学助産課程学生(ダイレクトエントリーコース)

夏休みはひと月近く帰省して日本の夏を楽しんだ。9月になって寮に戻ったら、なんと上階のお風呂からの水漏れで部屋はカビだらけ、あんまりな状況になっていた。思い切りホームシックになって、フィリピン人看護婦のジェレンにお夕飯をご馳走になって慰めてもらって、とりあえず空き部屋に避難した。2年目の始まりは、なんと不幸だった。

今学期の予定は、6週間実習、4週間授業、6週間実習、2週間冬休み、となっている。最初の2週間の実習は東サリー病院産後棟に配置になった。この病棟で働くのは初めてだった上にとにかく忙しい。ここの助産婦とはほとんど初対面だったし、その中で毎回一緒に働く人を見つけるのは大変だった。夏休みほげが抜けきらないまま2週間は過ぎていって、実習ごとに記入していく「記録ノート」に担当者のサインをもらい損ねてしまうくらい、頭の切り替えができていなかった。

次の分娩室実習ではメンターのメルと今まで以上に頻繁に働ける予定で、前々からとても楽しみにしていた。それなのに、メルは9月になって卵巣肥大で倒れてしまった。手術の後、本来なら婦人科棟で療養するところを、同僚たちのいるもう一つの産後棟に入院していたので、実習中に会いに行った。ベッドの上にいるメルを見て、いきなり挨拶をする間もなく涙がでてきた。元気でいるはずの近い人を病院のベッドで見るというショックからだったと思う。メルのほうが驚いて私

に気を遣うという図になってしまい、お見舞いにくるほうが気弱でどうする！と、とても恥ずかしかった。

メルは同僚たちに囲まれて「みんなで私を甘やかすんだから、早く退院しなくちゃ」と言っていたけれど、せっかく楽しみにしていた夏休みの旅行もこのおかげでキャンセルになってしまっ、かわいそう。でもこの機会に8週間休みをとったので、今までできなかったこと(例えば両親のいるウエールズに行くこと)ができる、とメルらしく前向きだった。

これで、この実習で私は分娩室でもメンターなしになった。今まではいつもメンターがいてくれたので、他の学生のように実習先で毎回いっしょに働く人を探さなければいけないという苦労とは無縁だったから、今回の実習では慣れない人と仕事をする大変さを何度も経験した。

悪いことは続く。同じころまた退学者が出た。今度は30代で子どもがいるサラとカレンだった。助産婦になりたい強い思いで苦勞して入学にたどり着いたのを知っていたし、絶対助産婦になって欲しいと思う素敵な2人だったので、とても悲しかった。電話するとサラは経済的理由、カレンは勉強についていくのが大変なと家庭との両立が難しくて離れる決意をしたのだと言っていた。2人ともこれで終わりではなく、状況が変わればコースに戻って来る可能性もないわけではないけれど。これで私のクラスは11人になった。